

## 地方行政の最前線

——公共施設移転後の跡地利用と市役所窓口業務改革——

### 公共施設移転後の跡地活用

原 清



原 清氏

改めまして、ご挨拶申し上げます。八王子市都市計画部都市総務課長の原でございます。本日はこのような機会を与えて頂きまして、ありがとうございます。本日は「公共施設移転後の跡地利用」ということで、八王子医療刑務所移転後用地の活用についての取り組みをご紹介します。どうぞよろしくお願いいたします。

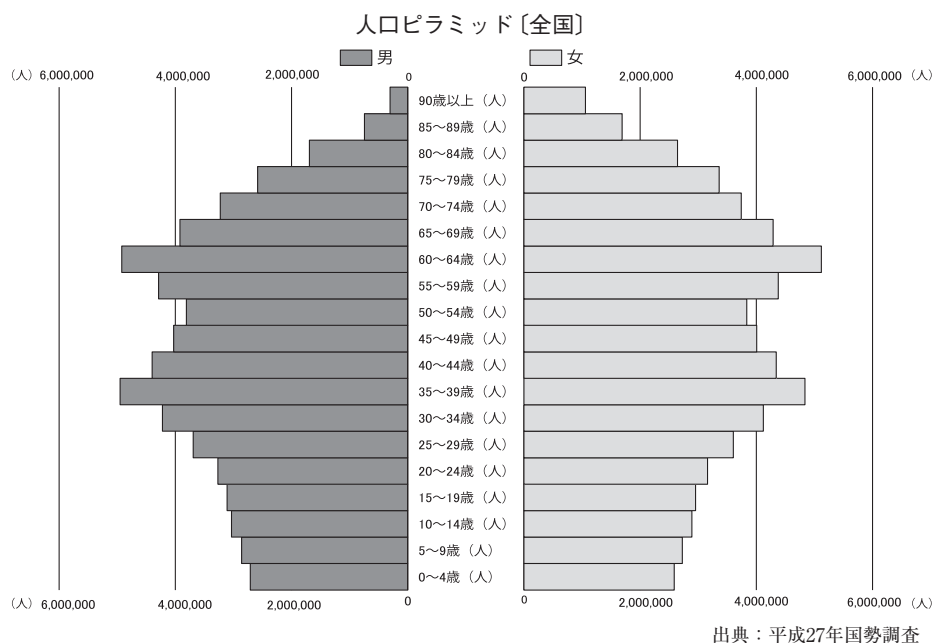
まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は1995（平成7）年に八王子市役所に入庁し、福祉部、税務部に勤務した後、財団法人日本都市センター研究室に2年間、研究員として派遣されておりました。そこで鈴木先生とご一緒させて頂いた、そのご縁で

本日このような機会を与えて頂いたのだと思っております。その後、総務部法制課やまちづくり計画部などを経て、2015年に税務部住民税課長としてかつての職場に戻り、更に2016年4月から都市計画部都市総務課に戻って参りました。

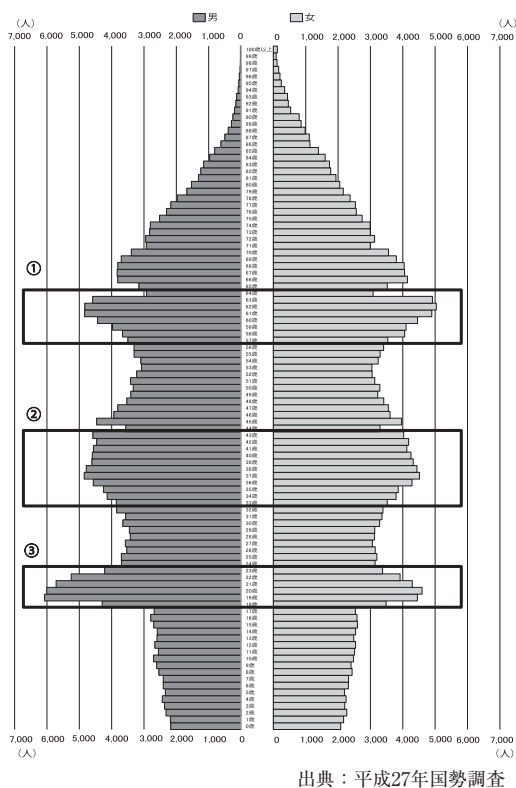
## はじめに

八王子市の概要について簡単にご説明申し上げます。八王子市は都心から西へ約40キロメートルのところにありまして、面積は186.38平方キロメートルです。また本市は昨年(2017年)市制施行100周年を迎えました。平成27(2025)年には都内初の中核市に移行したところでございます。本市の人口は約58万人でありまして、市の特徴としては、21の大学がある学園都市であること(9万5,000人もの学生が本市で学んでいます)が挙げられます。その他、年間300万人もの登山客が訪れ、登山客数では世界一と言われている高尾山、食べ物では八王子ラーメンで知られております。都市と自然が共存しており、「都会にないもの 田舎にないもの ここにある」がシティプロモーションのタイトルとなっています。

本市の人口約58万人と申しましたが、その人口構成の特徴について、ここでご説明申し上げます。人口に関しては、高野さんの講演で詳しく触れますので、ここではご



人口ピラミッド〔八王子市〕



く簡単にしておきます。ここに挙げましたのは、平成27（2015）年の国勢調査に基づく年代ごとの人口構成を示した図です。前ページの全国の場合と左の本市の状況を見比べて頂きますと、——全国の方では、人口の大きな山が二つあります。一つ目の山は第一次ベビーブームの世代で、現在60歳代になります。二つ目の山は第二次ベビーブームと言われている40歳代の人口です。こういう瓢箪型の人口構成が全国の標準的な人口構成の形状なのですが、本市の特徴は、三つ目の山があることです。10歳代後半から20歳代前半の部分が人口の山になっております。これは、大学への進学などを機に、本市に転入された方が多いことを示しています。

本市は多くの大学を擁する学園都市で

もあるのです。また、65歳以上の高齢人口は約14万人で、全体の25パーセントを占めます。転出者・転入者についてみますと、平成26（2014）年の各年代別転出者・転入者数では、10歳代後半での転入が多く、20歳代後半で転出が増えています。これは、大学への進学を機に本市に住んで頂いた方が、就職等のタイミングで転出されていったものとみられます。こうしたことから、本市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」においては、施策展開の重点ターゲット層を20歳代から30歳代の若年層と大学生としております。住みたい、住み続けたいと思って頂けるようなまちづくりを目指して本事業のみならず、様々な取り組みを行っているところです。

本日は、本市が国有地である八王子医療刑務所移転後用地を活用し、学び・交流・防災の機能を持った施設——「集いの拠点」と呼んでおります——の整備に向けた様々な検討を行っていることから、その内容についてご報告申し上げます。この事業の現在の進捗状況は、本用地に造る施設の整備の基本となる事項を定めた「整備基本計画」の内容について市民の意見を纏めるパブリックコメント等を行っている段階で

す。その後、用地取得→事業者公募→設計→施工→供用開始、と進んでいくこととなります。本日の報告は大きく分けて二つの部分から構成されます。一つは整備基本計画の素案作成に向けた検討の経過など、計画案が出来るまでの行政の意思決定の過程についてご紹介させて頂くこと。もう一つは、この整備基本計画(素案)の内容についてご説明することです。

## 1. 整備基本計画の検討経過、用地の概要など

まず計画の検討経過や用地の概要など、計画策定のプロセスについてお話致します。用地は八王子医療刑務所の跡地です。医療刑務所とは疾病等で普通刑務所での服役に堪えられない受刑者を収容する刑務所でございます、全国に4か所(八王子の他、大阪、岡崎、北九州)あります。そのうちの一つ、八王子医療刑務所が、今年(2018年)昭島市に建設された国際法務総合センター(矯正施設や研修施設(八王子医療刑務所の他、八王子少年鑑別所、東京婦人補導院、府中市の関東医療少年院・矯正研修所・国連アジア極東犯罪防止研修所、中野区の矯正研修所東京支所、千代田区の公安調査庁研修所、相模原市の神奈川医療少年院)を移転集約する施設の総称)に移転しました。この刑務所は1878(明治11)年、神奈川県監獄八王子監獄署として開庁し、その後1927(昭和2)年に八王子少年刑務所となって心神耗弱の少年受刑者を収容するようになりました。そして1951(昭和26)年より医療刑務所として発足しました。このように100年以上の歴史を経て、今年(2018年)1月に本市から移転したものであります。用地の概要についてご説明致します。八王子駅周辺は北口と南口とで街の表情が異なります。北口は商業・業務型の町並みなのに対して、南口は比較的閑静な住宅街が広がっている町並みです。医療刑務所はこの八王子駅南口から徒歩800メートル(京王線片倉駅からは約600メートル)のところにごございました。用地の特徴はその敷地内にも高低差が最大で12メートルあることです。この高低差をどう活用するかが、今後の検討項目の一つとなっております。敷地面積は刑務所と職員宿舍のあった場所とを合計すると約5.7ヘクタール、東京ドーム約1.2個分の広さです。余談になりますが、昨年(2017年)市制施行100周年記念事業として開催しました全国都市緑化フェアのスポット会場にこの医療刑務所が選ばれて、東京造形大学の協力の下、市民参加により刑務所の塀に市の歴史を描きました。こうした塀の取り扱いについても、今後の検討事項となっております。

次に、本用地活用の経過についてご説明致します。本用地については、医療刑務所



移転の話が持ち上がった頃から検討を開始しております。まず平成20(2008)年に「用地を取得する」という方向性を決定しました。その後、平成24(2012)年には、「八王子駅南口周辺地区まちづくり方針」を策定し、まちの核となるにぎわい機能や癒し・防災の機能が必要であるとし、平成27(2017)年には「郷土資料館移転後跡地及び公園用地として取得する」方針を改めて決定、併せて「八王子医療刑務所移転後用地活用計画」を策定致しました。そこでは、「みんなの公園」「歴史郷土ミュージアム」「憩いライブラリ」を導入施設として位置づけ、これを「集いの拠点」として整備することとしました。現在、「八王子駅南口集いの拠点整備基本計画」策定の作業中でありまして、この計画については本年(2018年)10月に市民向けのパブリックコメントを実施したところであります。

続いて、整備基本計画の検討体制についてお話致します。これに関係するのは4部4課に及びます。計画全体を統括するのが私の所属しております都市計画部都市総務課でして、「公園」を所管するまちなみ整備部公園課、「歴史郷土ミュージアム」を所管する生涯学習スポーツ部文化財課、「憩いライブラリ」を所管する図書館部中央図書館と連携・協力しながら進めております。これは市長部局と教育委員会の部局に跨る事業でありまして、また計画所管と事業所管の連携が必要です。ここが複合施設であることのメリットを最大限に発揮できるよう、縦割りにならないように留意しながら協力して進めているところです。3週間に1度打ち合わせを行っております。都市総務課の業務について、もう少し詳しくご説明しますと、都市総務課は課長－課長補佐－主査2名－主任3名の計7人の人員体制で、市街地整備の企画や調整の他、都市計画審議会や部の庶務を所管しています。

ここからは計画案(素案)が策定されるまでの流れの全体像についてご説明致します。先ほどご紹介しました関係4課での打ち合わせを経て、庁内部長級を集めた「庁内検討会議」に議論を付しまして、その後、外部の有識者や地域の代表者で構成する「外部懇談会」にこれを諮っていきます。そこで意見や打ち返しのあったものについて、再度修正し、検討を加えながら、もう一度この流れに載せる、ということを繰り返していきます。今回振り返ってみますと、平成28(2016)年から関係4課打ち合わせを46回、庁内検討会議を20回、外部懇談会を10回、それぞれ開催しております。そこで纏まった案は部長級の政策会議に諮り、市長決裁を経て、議会での報告を行った後に初めて、パブリックコメントに進みます。そこで市民の皆さんから更に意見を頂き、それを反映させて、最終的に整備基本計画を纏めていく。そういう流れになります。来

年(2019年)3月に策定の予定となっております。

ここまで大きな流れをご説明しましたが、もう少し個別の部分について詳しく見て参ります。まず、庁内検討会ですが、何しろ大規模事業でございますので、施策横断的な検討が必要となるため、企画部門、導入施設の所管部等の13部長で構成される検討会です。これがたとえ市民の期待の高い事業であり、市長公約であったとしても、財政負担の軽減や施設の床面積、将来の管理運営コストに至るまで、財務部門や行財政改革の部門からは、厳しく意見を頂きながら検討を進めているところです。次に、外部懇談会ですが、整備基本計画の策定に向けて、市が行う検討・調査について、多様な観点からの意見聴取・意見交換を行うことを目的として開催しているものです。官民連携事業や施設の運営、まちづくり等、様々な分野からの学識経験者5名に参加頂いている他、町会自治会の代表者1名、地元経済団体等代表者1名、地域情報誌の発行者1名、市民(地元住民、及び無作為抽出)3名にご参加頂いております。

次に民間事業者との関係についてご説明致します。本事業は官民連携を視野に入れておりますので、将来パートナーとなります民間事業者との意見交換もしっかり行っています。行政による思い込みや押し付けを少なくすることで、施設の魅力が高まり、利用者にとってもメリットが大きいとの考えからです。具体的には、サウンディング調査を平成29(2017)年に実施しました。これは、実現性の高い官民連携の手法や内容について、公募により参加した民間事業者等との対話を通じて、幅広い検討を行うための調査でありまして、財政負担の軽減や提供サービスの充実を図る観点から実施しているもので、12社にご参加頂きました。全国的には既に実施している自治体もございますが、本市では初めての実施でした。また、本年(2018年)11月には、事業者ヒアリングも行いました。これは、民間事業者の皆様に市の検討内容を理解して頂くと共に、事業者公募の条件設定等の提案を頂くことで、事業者公募において本市の意図を踏まえた提案や魅力的で実現性の高い提案を期待して実施しているものであります。そこで頂いたご意見について、その後のプロセスで反映できるものは、事業実施段階で参考にしたいと考えております。

その他、平成29(2017)年には、携帯電話によるアンケートも実施しました。既存施設の利用実態や整備する拠点施設の機能・サービスに関する市民意向を把握することが目的です。なかなか通常のパブリックコメントには意見が出てきにくい若年層から意見を集めたいという思いがありました。具体的にはNTTドコモのプレミアパネルの仕組みを利用して、15歳以上の市民から意見を集めました。

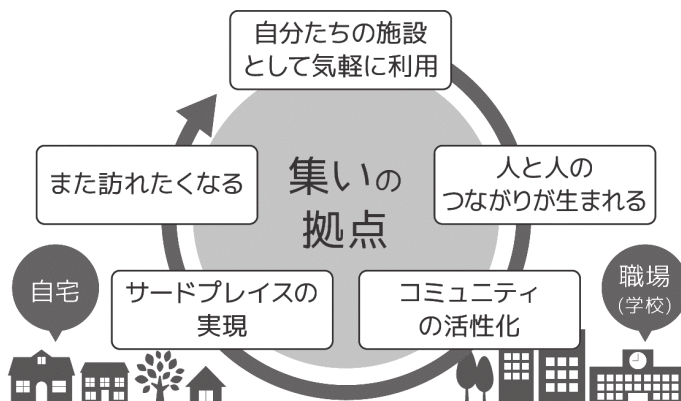
次に、検討のプロセスで実施した事例視察について申し上げます。他の自治体における先駆的な取り組みを視察し、参考とさせて頂いております。我々は都市計画部門の所属でありますので、図書館・博物館・公園の状況を日常の業務としては把握できていない部分もあります。視察を通じて、それらの最新の状況を把握するように努めています。岐阜市のぎふメディアコスモスは国立大学の跡地を活用し、図書館や市民活動交流センターを整備して、市民の集いの場となる複合施設を建設した事例です。山口市の山口情報芸術センターは、県有地を取得し、図書館・アートセンター等の施設を整備した事例です。豊島区の南池袋公園は、サードプレイスの理念が組み込まれた公園でして、行政と公園が共同して賑わいを創出している事例と言えます。神戸市の東遊園地の事例は、公園の日常利用の促進と、「単なる利用者」から「公園をよくしようとする利用者」への転換に向けて、カフェや持ち寄り型図書館等の取り組みを行っております。長崎歴史文化博物館は、県と市が一体となって博物館を運営している事例であり、見る人を飽きさせない体験型の展示等が行われているのを視察しました。伊万里市図書館につきましては、市民と行政、設計者が一体となって図書館を作り上げた事例として視察を行いました。武雄市図書館は、居心地の良い空間作りや集客を最重要課題とし、利用者の意見を取り入れながら、施設づくりやイベントに力を入れている事例として視察しました。

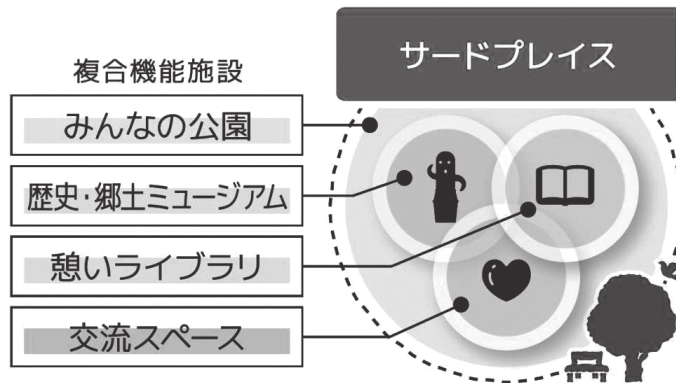
今回の整備の背景、本市の目指す将来展望について、本市の「まち・ひと・しごと総合戦略」に基づいてご説明致します。本市は既に人口減少の段階に入っておりますが、今後も人口が減少することを前提としたうえで、平成72(2060)年の人口については平成22(2010)年の時点の約8割を維持することを目指しています。それを実現するため、様々な施策を展開していく中で、地域の賑わいを創出するという視点に立ち、まちづくり事業の一つとして、本事業を推進しています。本事業以外の、八王子駅周辺の整備事業についても触れておきましょう。医療刑務所跡地の周辺では、道路整備が予定されている他、八王子駅北口では東京都が産業交流拠点の整備を進めています。これは、見本市や物産展を開催できる多摩地域最大の展示場を持つコンヴェンションホールでありまして、平成33(2021)年度の完成予定です。その他、ペDESTリアンデッキの延伸・整備を行う等、中心市街地の整備を進めているところでございます。——ここまで、整備基本計画案策定の流れや事業の前提についてお話致しました。

## 2. 「八王子駅南口集いの拠点整備基本計画」(素案)の内容

ここからは、「八王子駅南口集いの拠点整備基本計画(素案)」の内容についてお話し申し上げます。まず、この整備基本計画の位置づけについてであります。整備基本計画は、集いの拠点の整備について、市として譲れない基本的な考え方を示すものであり、同時に、国有地を取得するに当たって国に示す事業計画となるものです。また、官民連携事業を視野に入れ、民間事業者等からの提案の余地を残すように留意してあります。本計画は、「八王子ビジョン2022」「都市づくりビジョン八王子」等を踏まえ、平成28(2016)年3月に「八王子医療刑務所移転後用地活用計画」を策定した後、整備に向けた具体的な検討を進めて参りました。市の最上位の計画である基本構想・基本計画「八王子ビジョン2022」は平成24(2012)年に策定されたもので、次世代に八王子の歴史・文化を継承していくために、八王子の魅力の再発見につながる施設の整備を進めることになっています。また、都市計画マスタープランである「都市づくりビジョン八王子」は平成26(2014)年に策定されたもので、中央地域の地域づくりの方針を示しております。この他、同年に策定された「ビジョンはちおうじの教育」や翌年に策定された「八王子市文化芸術ビジョン」の中でも本事業が明確に位置づけられています。

この計画の基礎となった「八王子医療刑務所移転後用地活用計画」の内容について触れておきましょう。これは、用地の活用や導入施設等について整理した計画でして、本用地の活用内容を初めて市民にお示ししたものでした。これについても、多くの市民の方から意見を頂きながら、策定して参りました。この中では、「活用の方針」として、「QOL(Quality of Life)が高まること」や「サードプレイスを提供すること」を目指





すとされております。「サードプレイス」とは、自宅とも職場（学校）とも異なる，コミュニティの核となる居心地の良い第三の居場所のことを指します。その「将来イメージ」は「学びと交流が次の100年をつくる」「まちに開いた，新たな集いの拠点」です。具体的な「導入施設」としては，

- ・防災機能を持った，まちにつながる「みんなの公園」
- ・次の100年につながる「歴史・郷土ミュージアム」
- ・学び・交流・集いを促進する「憩いライブラリ」

を予定しています。

では計画の中身です。現代社会において，自宅でも，学校・職場でもない，居心地の良い第三の居場所（サードプレイス）の重要性が高まっていることから，市の将来を見据え，新たなニーズである「サードプレイス」を提供することが，この「集いの拠点」を整備する目的であります。市民の皆さまに，自分たちの施設として気軽にご利用いただき，様々な学び・交流を通じて，人と人とのつながりが生まれ，コミュニティの核となる「サードプレイス」を実現し，また訪れたくなるという好循環を生み出していく。そういう場所にしたいと考えています。「集いの拠点」の利用がライフスタイルとなり，ここで得た学び・交流によりまちへの愛着を育んでいくことで，市民力・地域力の向上や将来の定住人口の維持につなげたいと思います。この施設は，もとより幅広い市民の方に利用して頂きたいというのが大前提ですが，中でも，次の100年に向けて，若年層（20～30歳代）の利用促進が重要と考えます。

整備に当たってのコンセプトは三つございます。まず「八王子のシンボル・ブランドへの貢献」です。八王子のシンボルとなるような施設内容及びサービス内容を実現すること，長く愛される拠点施設となるよう八王子市の歴史的特色を継承すること，



そして防災拠点としての整備による安心・安全な生活環境づくりに貢献すること、が挙げられます。二つ目は「複合性・多様性の確保」です。導入される機能の相乗効果と波及効果による、新たな価値観・ライフスタイルを創出し、幅広い市民に多様な過ごし方を提供・提案できる複合施設として整備したいと考えております。そのためにも、市民も含めた多様な主体が積極的に運営参画できる態勢を整備していく必要があります。そして三つ目は「可変性・継続性の確保」です。時代に合わせて、市民サービスを提供していくことのできる施設利用と事業手法を採用し、官民連携も視野に入れた効果的な運営態勢を構築して参りたい。これは、施設の運営、にぎわい形成に市民・事業者等が参画できる空間を整備したいとの考えからです。

では、その施設はどのような機能を持つことになるのでしょうか。まず「集いの拠点」全体のイメージをご説明致します。「集いの拠点」は「次の100年をつくるみんなのサードプレイス」です。それは、防災機能を備えた公園の中にある、学びを支える歴史・郷土ミュージアム、憩いライブラリと、交流を促す交流スペースとが一体となった複合機能施設であります。具体的には、学び機能（地域資源、図書等のコンテンツ、体験等を通じた学びを提供）、交流機能（利用者同士や家族・仲間とのつながりを生み、育む交流を提供）、防災機能（一時的な避難や災害支援活動を支える防災性を提供）を備えます。

各施設の個別の機能についてご説明します。まず「みんなの公園」。コンセプトは「市街地の中の花と緑がつながりと魅力をつくりだす まちのシンボル」としました。まちの貴重な緑の中で、イベントができる広場があり、誰もがゆったりと心地よい時間を過ごせる、防災機能のある公園です。その機能を更に具体的にみていきますと、この公園は、花や緑のなかの心地よい時間や交流を促すイベントのある「集い・交流機能」、健康づくりの機会や子どもの遊び場がある「リクリエーション機能」、まちとつながる美しい景観や四季を楽しむ景観がある「景観形成機能」、そして一時的な避難スペース等、災害時の備えがある「防災機能」を備えることが期待されます。次に「歴史・郷土ミュージアム」。これは、市内にある郷土資料館が移転するものです。コンセプトは「地域への愛着や誇りを感じるミュージアム」です。ここでは、まちの歴史・文化を学び、見て・触れて・感じることで、「はちおうじ」への愛着や誇りを育んで参りたいと考えております。具体的な機能としては、郷土の歴史・文化を学び、継承し、愛着を育てる場としての「博物館機能」、市民協働で博物館を成長させる「協創機能」、大学・博物館等と連携して研究・教育・普及活動を行う「ネットワーク機能」を備えます。それから、「憩いライブラリ」。コンセプトは「また来たくなる みんなのライ

ブラリ」です。子どもから大人までが、緑を感じる空間の中で、学び、ふれあい、交流できる居心地の良いライブラリを目指します。この施設は、その基本となる「図書館機能」の他、ワークショップ等の学びを通じた交流によって、ひとりでは得られない学びがある「学習・交流機能」、会話や飲食ができ、子ども連れやグループにやさしい環境がある「利用促進・滞在機能」を有します。「憩いライブラリ」については、前の活用計画の中で、「実現性を精査すること」となっておりまして、そのため、市の公共施設マネジメントや図書館全体の機能分担の観点から検討を行い、既存図書館の抱える課題（子どもの読書スペース、滞在スペース、飲食スペース、学習スペースの確保等、図書館ニーズの多様化への対応）を解決することを目指して、従来の図書館サービスにとどまらない新たなサービス内容を提供することと致しました。続いて「交流スペース」。この施設のコンセプトは「公園、ミュージアム、ライブラリをひとつにする、多目的スペース」ということです。公園とミュージアムとライブラリとをつなぎ、発表やマルシェ等、様々な集いや交流が生まれる、みんなの居場所となる空間、それが「交流スペース」です。それには以下の機能が期待されます。すなわち、歌・踊りの成果発表の場がある居心地の良い空間としての「集い・交流機能」、自習やスキルシェア等様々な学びの場としての「学習・交流機能」、健康づくりや子どもの居場所・情報交換の場としての「レクリエーション機能」、居心地良く緑が見える読書空間としての「利用促進・滞在機能」です。

施設の規模は、導入施設の機能の実現や、既存施設の課題、市民の意見への対応等を考慮し、国等の基準や類似施設を参考にして設定しました。特に、共有できる機能を交流スペースに集約することにより、利用しやすく、しかも効率的でコンパクトな高機能な施設の実現を目指しています。取得する用地全体（約5ヘクタール）を公園区域とし、建物については延床面積約7,500平方メートルで、2～3階を想定しています。このうち、歴史・郷土ミュージアムが約3,000平方メートル、交流スペースと憩いライブラリが約4,500平方メートルとなります。「集いの拠点」の整備目的実現のため、ハード整備のみならず施設運営等のソフト面を重視します。将来にわたり多くの人に利用して頂くためには、多様なニーズへの対応、居心地の良い空間の創出、社会変化に対応し時間と共に魅力を高める必要があると考えるからです。また、事業手法としては、ソフト面を重視した施設とするために施設運営をも見据えた設計ができるか、事業全体のソフト面、コストパフォーマンス面での効果や効率性が期待できるか等の点を検討して参ります。



整備に向けた今後の検討・留意事項をお話致します。周辺地域との関係や位置づけに関しては、アクセスや回遊性の向上に向けた検討や周辺住環境への配慮を検討せねばなりません。導入する機能や空間の質に関しては、地域ブランドの向上や地域資源に触れられるような居心地の良い空間の創出、将来に亘る市民の利用を検討する必要があります。将来的な施設の維持管理に関しては、魅力を向上させるような施設運営、維持管理のためのマネジメント、将来の利用ニーズ等に応じた柔軟な利用やリノベーションの容易性が検討されねばなりません。この他、継続的な市民参加やデザイン（シンボル性の高い景観形成）等を考えていく必要があると認識しております。

### 3. 今後の課題

整備基本計画の「内容」ではありませんが、今後の課題として、まず行政内部については次の四つが挙げられます。第一に事業手法の決定。設計・建設・維持管理・運営といった各業務を分割して発注する従来型の方法、これらを一括して発注するPFI事業やDBO方式などいろいろな方法があり得ます。コスト面や施設運営の側面を重視して決定して参りたいと考えております。第二に管理運営の決定。複合施設の運営を市の直営とするのか、それとも指定管理とするのか。或いは調査研究部門は直営とし、それ以外を指定管理とする組み合わせ方式とするのか。——この点が検討課題となっております。第三に財政負担の軽減。本市はもとより、中心市街地のみならずそれ以外の地域においても様々な事業を展開しております。そうした中で、国や東京都の補助金を活用したり、公園の設置管理許可など公園施設内で収益を上げる工夫をしたりなど、この施設を持続可能なものとするために検討しなければならない課題があります。公共施設については、建設コストのみならず、管理運営のコストが掛かり続けていきますので、将来に亘る負担軽減に留意しなければなりません。第四に関係所管課との連携・協力。複合施設としての特長を最大限に活かせるように、関係所管課との緊密な連携・協力が必要となって参ります。

次に外部の課題については、次の四つの課題が挙げられます。第一に用地取得の調整。国の財政審議会で審議される案件でございますので、国有地取得に向けてそのための準備や調整に万全を期す必要があります。第二に市民参加の機会（機運の醸成）。市民の方々にサードプレイスとして愛着を持って利用して頂くためには、施設の供用開始まで、ワークショップなど様々な市民参加の機会を設定していきたいと考えてお

ります。第三に民間事業者の意向把握。先ほども申しましたが、行政だけで決定しない、パートナーとなる民間事業者の意見を十分に聴取しながら進めていくように、心がけます。第四に刑務所のレガシー活用。先ほど塀のことを少し申し上げましたが、「この場所に100年以上に亘って刑務所があった」ということ、その歴史、レガシーを残すことを望む声も多くありますので、検討していかねばならないと考えております。

## 終わりに

最後に、今後のスケジュールについて申し述べます。現在、パブリックコメントの手続や事業者に対するヒアリングを行った段階です。これらを踏まえて、今年度中にこの計画を策定する予定であります。平成31(2018)年度以降は、用地取得の手続と施設整備の準備に向けた検討を進めて参ります。平成33(2021)年以降に用地を国から取得し、設計と整備に入ります。八王子駅北口の産業交流拠点の整備等、その他の八王子駅周辺での関連事業と共に、八王子市が、次の100年まで魅力ある都市として、「住みたい」「住み続けたい」都市であり続けていくために、この事業に全力で取り組んで参る所存でございます。私のご説明は以上でございます。ご清聴ありがとうございます。(拍手)

## 【対論と質疑応答】

**鈴木：**丁寧なご報告をありがとうございました。市役所内外の様々な課題について検討しながら、巨大な事業を進めておられることがよく分かりました。ここからは質疑に入りますが、まず私の方から三点ほど質問させていただきます。

第一点ですが、今回のこの事業は複合施設の建設ということでした。図書館や公園、そして防災機能、様々な役割を持った施設となります。そうしますと、そこに色々な要素が入って参りますので、目的の設定が曖昧になりがちなのではないか、という印象があります。今回はサードプレイスという新しいアイデアを打ち出しておられる訳ですが、目標設定の段階でどのような検討をされたのか、どのような工夫をされたのか、という点をお伺いしたいと思います。

第二点目としまして、今は人口減少時代でありまして、公共施設を従来のまま継続していくのはなかなか難しいといわれております。予算も減っています。そうした中で、公共施設の縮減を進めるのが全国的なトレンドになっているといってよいでしょう。今回、八王子市においてこのような大規模な施設を建設されるという方針を打ち出されるに当たって、長期的なコストの問題について、どのような検討をされたのか、どのような議論があったのか、ということをもう少し詳しくお聞かせ願いたいと思います。



鈴木潔准教授

最後に第三点目ですが、官民連携というのが現代の行政において重要な視点とされており、今回のプロジェクトにも取り入れられるとのことでした。施設の管理運営に当たって、民間委託については、それに賛成する意見、反対する意見が出てくるのではないかと想像されます。各地の施設を視察されたようですが、例えば、佐賀県武雄市の市立図書館については、民間委託するかしないかを巡って非常に激しい議論がありました。今回、この新しい施設について、仮に民間委託をするとなった場合には、どういう検討課題があるのか——プラス、マイナスいろいろあるかと思いますが——、その点について教えて頂ければと思います。

原：ご質問ありがとうございます。まず、第一点目についてお答え致します。目標の共有ということでございますが、先ほどお話をさせて頂きましたように、私ども都市計画課が全体を統括致しますものの、基本的には関係するそれぞれの部署があり、公園であればまちなみ整備部公園課、歴史郷土ミュージアムであれば生涯学習スポーツ部文化財課、というふうに各所管課がそれぞれの役割に沿って進めております。例えば歴史郷土ミュージアムの場合、市の歴史文化を次世代に伝えていくという目標があるわけですが、他方で、この事業全体の目標としては、サードプレイスとしてのにぎわいを創出するという側面もございます。歴史郷土ミュージアムについては、これまでの郷土資料館が、必ずしも利用者数が伸びていないということもあり、今後は集客の工夫が一層必要になってきており、全体の目標とそれぞれの部署の目標とを擦り合わせていく、整合させていくことが、今回特に意識しているところでございます。

第二点目の、長期的コストの問題については、本市におきましても、公共施設マネジメントを実施しておりますし、立地適正化計画の策定も進めているところです。人口減少を見据えて、やはり公共施設については集約できるものは集約していくという発想の中で、しかし同時に、必要なところには必要な投資を行って、次の100年に向けたまちづくり事業展開を

進めていく，ということになろうかと思います。

それから第三点目，官民連携事業につきましては，官民連携事業を視野に入れて進めるという方向性は持っておりますが，具体的にどこまで，或いはどの部分を民間に委託するか，という点は今後の検討課題です。このような複合的な施設においても，例えば八王子市の歴史文化を継承し伝えていく部分については，公共的な観点から市が直接に管理運営する体制であって欲しいといった声も多数寄せられていますので，市として守るべきものと民間が得意とする領域と，それぞれございますので，バランスを考慮しながら鋭意検討を進めて参りたいと考えております。

**鈴木：**ありがとうございます。官民連携の点については，メリハリをつけながら，その最適なバランスのあり方について考えておられることがよく分かりました。

それでは，フロアの皆さまからもご質問をお受けしたいと思います。時間の関係でお一人かお二人くらいになろうかと思いますが。

**フロア：**お話ありがとうございます。私は専修大学のOBでございますが，八王子市に在住しております。先ほど人口構成の問題に言及されましたが，今後，八王子市におきましても，オリンピックの開催や入管法の改正等を受けまして，外国人との共存・共生ということが問われていくことになろうかと思われます。この観点と今回の跡地利用，複合施設の建設は何らかのかたちで繋がるのかどうか，という点についてお聞かせ願いたいと思います。

**原：**ご質問ありがとうございます。八王子市は，先ほど申しましたように学園都市でございまして，留学生も非常に多く暮しておられます。——今，その数についての具体的なデータは持ちあわせていませんが，外国人も含めて人口の課題は高野さんのご報告でも出てくるかと思ひます。また，将来の社会状況変化を見据え，整備コンセプトには多様性や可変性の確保ということが入ってきておりますので，ご指摘いただいた国際化や多文化対応といった視点も踏まえ，検討を進めていきたいと考えております。

**鈴木：**原課長，貴重なご講演をありがとうございました。（拍手）

それでは，続きまして高野課長からご報告を賜りたいと思います。よろしくお願い致します。